

小説家

三上 延さんに聞く

聞き手 山岡三子さん ●フリーアナウンサー・名古屋短期大学客員教授



みかみ・えん

武蔵大学人文学部社会学科卒。高校時代から小説家を目指し、古書店勤務などを経て、2002年『ダーク・バイオレット』でデビュー。2011年の古書ミステリー『ピブリア古書堂の事件手帖』が人気となり、『ピブリア古書堂の事件手帖4』が日本推理作家協会賞長編および連作短編集部門にノミネートされる。

山岡 本日は、小説家の三上延さんにお話をうかがいます。

2002年にホラーアクションを題材にした『ダーク・バイオレット』でデビューされ、2011年には古書にまつわる秘密を題材にした『ピブリア古書堂の事件手帖』を発表。ホラーからファンタジーまで、幅広い作風で活躍されていらつしやいます。

『ピブリア古書堂の事件手帖』シリーズはたいへんな人気で、累計が600万部を突破したそうですね。

書き始める前に、詰まる。

「読んで調べて」の繰り返し

三上 ありがとうございます。ちょうどいま、シリーズの新作の準備に入ったところなので、詰まってしまっています。

山岡 どういうところで、詰まるのでしょうか。

三上 『ピブリア古書堂の事件手帖』はエンターテインメントなので、どうやってエン

ターテインメント性を持たせつつ、ミステリーの形に納めるのが、毎回、一番の悩みです。あとは、取り上げる本を選ぶところまでがたいへんですね。書き始めたらずき始めたで悩むのですが、文字にする前段階の書き始める前が一番きついです。七転八倒しながら、資料を地道に「読んで調べて、読んで調べて」の繰り返しです。

山岡 最新刊である第6巻のあとがきに、あと1〜2巻で終わるつもりだと書かれていらつしやいましたね。

三上 物語の時代設定を2010年頃にしてしまっているのが、題材にした古書が、2010年の時点で復刊されていなかったのに、執筆段階で復刊されていたりすると、読者が違和感を覚えてしまうのです。100年くらい前の古書を取り上げれば、数年で事情が変わることは少ないと思いますが、あまり古いと今度は読者が分かりにくくなってしまふので、いつも悩んでいます。

山岡 同作品はテレビドラマ化やマンガ化

もされるなど、とても大きな反響を呼んでいますね。私が教えている学生の間でも、栗子といえば、「ピブリア古書堂」の店主というくらい、本を読まないと言われる若者にも浸透しています。

三上 『ピブリア古書堂の事件手帖』シリーズは、私がそれ以前に書いたものとは比較にならないくらい発行部数になったので、一時期は戸惑いもありました。しかし、私がやっていることは以前と変わらないし、書く苦労が減ったわけでもありません。逆に、それだけ多くの方が読んでくださっているのが、事前のリサーチが厳しくならざるを得ず、リサーチに時間を取られるようになりました。

自分で古書ばかり取り上げていて大丈夫かなと思うときもあるのですが、「自分が好きだから」という理由で小説として取り上げたものを「おもしろい」「読んでみたい」と言われることはうれしいですし、ありがたいことです。

実在のものを エンターテインメントにするために

山岡 読者の期待も、シリーズを重ねるごとに高まりますしね。

三上 古書は本当にこわいジャンルで、どんなテーマを取り上げても、日本のどこかに絶対にその専門家がいらつしやるんです。ある古書について、カバーが掛かっているつもりで書いてところ、「初版にはカバーはなく、バラフィン紙に包まれていた」と読者からご指摘をいただいたことがあり、血の気が引く思いをしました。



三上延さん



物語としては完全にフィクションですが、実在する本を題材としており、実在のものをエンターテインメントにしている以上は、詳細にはこだわりたいと思っているので、事前のリサーチを小手先で済ませるわけにはいかず、出版までの時間がどんどん長くなってきました。

あらゆるものに興味があつた高校時代
—— **ガルシア・マルケス、演劇、映画、音楽**

山岡 小説家になりたいと思われたのはい

つ頃でいらしたのでしょうか。

三上 たぶん高校生の頃だったと思います。私の最初の本が出たのは30歳の時で、ライノベルのレーベルでしたが、このジャンルでは、読者に年齢が近い20代の書き手が多いので、小説家としてのデビューは遅いほうになると思います。

山岡 小説家になりたいと思う人は少ないと思いますが、高校時代からの目標である小説家になるためにどのような努力をされたのでしょうか。

三上 自分が書いた小説を人に読んでもらうことが好きだったので、書き続けていれば、いつか小説家になれるに違いないと考え、とにかく書いていました。完全に思いついていました。

山岡 高校時代に書かれた小説はどのような内容の……。

三上 あまり思い出したくないのですが（笑）、コロンビアのガルシア・マルケスという小説家がノーベル文学賞をとって日本

でもブームになり、高校生でも文庫本を手しやすくよく読んでいたので、ラテンアメリカの幻想文学のようなスタイルの、日本を舞台にした物語でした。友人には「よくわからない」と言われる一方で、「おもしろい」と言われることもあったので、余計に思いつきがあったのだと思います。

当時は勉強よりも、演劇や映画や、バンドブームだったので音楽などにも興味があつて、目に入るものは全部楽しんで、吸収してやろうという感じでいろいろなことをやりました。そのなかでも、ペンと紙さえあれば一人で楽しめる娯楽としての小説が、全体の興味の半分を占めていました。

武蔵大学では文芸部の副部長をしていました。お互いの作品について忌憚のない感想、というか悪口を言い合うグループが部内にあつて、小説の書き方こそ教わらなかったものの、リサーチの経験を重ねることができたことが、いまに役立っています。

まだまだ若かったので、自分には才能が

あると錯覚していて、「卒業しても就職はせずに小説家になる」と親に宣言した時の、親のいやな顔はいまでも忘れられません。本当に悪いことをしたと思っています。いまは。

山岡 自信がおりだったのですね。

(商業) 作家になるといつと

三上 商業作家になるということがどういうことか、全くイメージできていなくて、作品を書き、新人賞に応募していれば、そのうち小説家になれるだろうと漫然と思っていたのです。

山岡 実際に小説家の道に入った後はいかがでしたか。

三上 28歳の時に、いったんは小説家を諦めて古書店で働きました。その後、再び書き始めて新人賞に応募し、落選はしたものの拾い上げていただいてデビューすることができました。

それまでは、100ページ程度の短編を

1年かけて仕上げるような、「だめな小説家志望」のアマチュアでしたが、小説だけで食べていこうと思ったら、3カ月に1冊出すのがプロだと編集者に言われ、いろいろ教えていただきながら、450枚くらいの原稿を、リサーチして構成を考えるのに1カ月、実際の執筆に1カ月を使い、あとの1カ月で見直しや校正を行うことができるようになりました。

スピード感を考えるようになってからは、小説の書き方も変わり、デビュー作はパソコンでの執筆でしたが、いまはまずルーズリーフのノートに手書きをして、それを手直ししながらパソコンに入力し、プリントアウトしてまた手を入れるという繰り返しです。

山岡 「書く」ことを生業とされている小説家の方々には、「書く」ときの七つ道具とものいうべき、お気に入りのアイテムが必ずあるように思うのですが、三上さんはいかがですか。

三上 グリップのゴムがすごく柔らかくて、手触りがよく感じるシャープペンシルが第一稿用です。いつ生産中止になるか分からなくて心配なので、10本ほど買いだめしてあるくらいのお気に入りです。4色ボールペンは修正用で、赤、青、緑の順で書き入れを行います。緑までいって、最初の原稿に戻すこともよくありますが(笑)。

パソコンについても、キーを押した時の感触が機種によって微妙に違うキーボードにはこだわりがあって、気に入った機種を探しに秋葉原のキーボード専門ショップへ



山岡三子さん

行ったこともあります。そういうものを使
うと執筆速度が上がるというわけでは
ないのですが、お気に入りの品が目の前
にあるとホッとするんです。

ふだんは、米国の通販サイトで購入し
た、おそらく日本にはないオリジナル
の大きなメッセンジャーバッグに道具
一式を入れてファミレスへ行き、午前
中はそこで原稿を書いています。昔は
睡眠時間が2、3日で3時間程度でも
平気でしたが、いまはもう絶対無理で
す。年齢とともに体力が落ち、執筆速
度も遅くなってきたので、健康に気を
付けて、規則正しい生活をするように
しています。週に2回はジムに通い、
暴飲暴食をせず、1日に1食はきちん
と野菜を食べるようにしています。

山岡 『ピブリア古書堂の事件手帖』第4
巻で江戸川乱歩を取り上げる際には、
立教大学の「旧江戸川乱歩邸」にいら
っしゃったそうですね。

旧江戸川乱歩邸を訪れて 解けた積年の謎

三上 乱歩の息子さんが立教大学の教授で、
キャンパスのすぐ裏手に旧乱歩邸があ
った縁から、立教大学で乱歩邸を管理
することになったのですが、いやあ、お
もしろかったですね。積年の謎が解け
ました。

山岡 積年の謎？

三上 乱歩のアンソロジーに『空中紳
士』という稀覯本があるのですが、そ
の初版と第2版は見つかったことがな
く、私はそもそも存在しないのではな
いかと思っていました。昔は、本が売
れているように見せるために、本当は
初版のものを第3版と表記するよう
なことがあったのです。

きちんとやっている出版社であれば、
そうではないところもあったようで、
乱歩の作品では、ほかにも『陰獣』と
『空中紳士』の初版本が出てこない
ので有名で、乱歩邸で確認したのが
すが、やはり第3版し

ありませんでした。著者が初版・第2版を持ってい
ないというこ
とは、最初か
らなかったの
ではないかと
思います。

山岡 ご自分
で推理し、実
際に確かめる

というおもしろいエピソードですね。

三上 このエピソードを第4巻で使いた
かったのですが、ちょっと物語の枠に収ま
りきれなくて断念しました。

旧乱歩邸では、私が作家であるとい
うことで、土蔵の中の方まで見るこ
とができ、写真もたくさん撮るこ
とができました。有名なミステリー作
家のエラリー・クイーンという名前は、探偵小



説を書くために二人の作家が用いた筆名の一つですが、その二人のうちの一人であるフレデリック・ダネーに乱歩が贈った本を見せていただき、乱歩直筆の英文の手紙の下書きが出てきて、英単語を調べたメモがあったりして、とても興奮しました。

さらに、土蔵の2階は完全に稀覯本コーナーになっていて、立教大学がきちんと管理しています。一番びっくりしたのは、乱歩自身で「保存用自著」という箱を作って、仕事がない戦時中に自著を全部整理して、年代順に揃えて箱に入れ、説明まで付していることで、いったい誰に見せるつもりだったのだろうと考えてしまいました。

異なる複数の読者を想定しながらの執筆活動

山岡 執筆をする時には、ご自分の中に3人の読者を想定していると伺いました。一人は、50代の古書好きの男性。もう一人は、あまり本を読まない20代の女性。そして3

人目は、小説家にならなかった40代の自分。この3人の内的読者を満足させられるかどうか、お考えになるそうですね。

三上 いつもその3人というわけではなく、対象とする読者に応じて少しずつ変わったりのするんです。だいたい3人くらいを用意して書いていますね。特にビブリアシリーズは、そこで取り上げている古書について全く知らない人と、逆に私よりも詳しい人、この2人を想定します。

山岡 小説家にならなかったご自分を想定されるのは、なぜですか。

三上 小説はちょっと不思議なところがあって、自分が楽しんで書いていないと、読者にもおもしろいと思ってもらえないというところがあるので、執筆していて自分が楽しめるかどうか重要です。しかし、小説家である自分を唯一の基準にしてしまうと、読者を想定していないことになってしまうので、純粹に読者としての自分、つまり小説家になっていない、不純、不埒で

はない自分を想定する必要があるのです。

山岡 どうしてもプロの視点というものが入ってきてしまうことですね。

三上 そうです。古書店員や他の仕事に就いている自分を想定し、彼が読んだらどのように思うだろうと想像します。

自分の中に読者を想定することは小説のキャラクター作りの一環でもあるので、3人だけではなく、いろいろな人物が入れ替わり立ち替わり出てきます。中学生と高校生の息子がいる主婦とか、ちよつと早熟な中学1年生の女子とか。そういった人たちにどれくらい満足してもらえるかをいつも考えながら、原稿を書いています。

山岡 次の作品を読者の皆さんも楽しみにしていると思いますが、進捗具合はいかがですか。

三上 近く「江ノ島西浦写真館」という新刊が出る予定です。江ノ島にある、閉鎖された写真館を舞台にした連作短編のミステリーです。高校の文芸部にいた頃、後輩の

実家が写真館を営んでいて、よく遊びに行っていた思い出があったことと、写真というものはどこの家庭にもあって、スマートフォン
の普及で、写真を撮らないという人はいない今、写真というメディア自体はあっても、写真館は少なくなってきたまってるので、取り上げるとしたらおもしろい題材だ
と思っていたので、いつか写真館を小説で
取り上げてみたいと思っていました。

ストーリーは閉鎖された写真館の館主が
亡くなり、その孫が写真館の整理をしてい
ると、注文を受けて撮ったのにお客さんに
渡していない写真がいくつも出てくる。そ
れを届けようとするのだけれど、それぞ
れの写真に何かしらおかしいところ、変わ
ったところがあつて、主人公である館主の孫
がその謎を解いていくというものです。

山岡 ビブリアシリーズの次作が待ちきれ
ないというファンの声もありますが、あ
えて写真館を舞台にしたビブリアとは別
のお話を挟むことには、何か理由があるの
でしょ

うか。

三上 ビブリアの次作を心待ちにしてく
ださっていることはとてもうれしいのですが、
ビブリア以外のジャンルの小説も書き続け
ていきたいと思っている中で、ビブリアが
完結した後のことも見据えながら、江戸時
代のものも書いてみたいし、大正末期から
昭和初期の話も書いてみたいです。

以前、関東大震災の少しあとの時代を舞
台にした短編を書いたことがありました。
その時に、資料を集めて当時の風俗のも
とでストーリーを展開するということの目
途が立ったので、また書いてみたいと思
って構想を練っているところです。ちょっ
とミステリーホラーのような感じに
したいと思っています。

古いもの、新しいもの 「調べる」っておもしろい

山岡 ご自分の小説をエンターテインメン
トであるとおっしゃいましたが、小説を通

して「いまの時代に伝えたいこと」とい
うテーマなどがありますでしょうか。

三上 あまり大それたことは考えていない
のですが、「古いものでも新しいものでも、
おもしろいものは、おもしろい」と思っ
て、「調べる」ことって、すぐおもしろ
いんです。

昔のことで、その当時は何でもないと
だったかもしれないことが、いまの自分
の目で見ると、とてもおもしろく感じる
ということがあり、それって調べ物をする
と誰もが感ずることだと思ふのです。「そ
れぞれの視点で調べる」とおもしろい
ものが見つかるといことが、私の小説
を通して伝わるといいですね。

山岡 インターネット等で探し物に効
率的にアクセスできるいまの世の中にあ
つて、「読んで調べる」ことは面倒だと
とらえられ
る人もいるように思ふのです。

三上 高校生の頃くらいから、自分で
調べた何かを見つけたのが好きだ
ったのです。

定期的に興味が湧くテーマがあつて、高校時代は、トイレの歴史を文芸部の文集に発表したこともあります。大森貝塚を発見したエドワード・S・モースが、当時の日本の男性用便器について非常に詳細なスケッチを残しているとか、ビクトル・ユーゴーのレ・ミゼラブルの第4部では、冒頭にパリの下水道の歴史について50ページくらい書いてあるとか。これは、フランス革命前のパリに関する貴重な資料にもなっているのです。

大学の社会学科では、卒業論文のテーマに有害コミック規制を取り上げ、ずいぶんリサーチしました。今でも仕事に全く関係がないことでも、ものすごく調べるときがあります。

山岡 日本人の活字離れが指摘され、インターネット等の普及とともに、特に若い人は本を読まなくなったなどと言われます。本の魅力とは、何でしょうか。

40年続けて飽きない 本ほどおもしろい娯楽はない

三上 自分自身がずっと本を読んできて、周囲を見聞きした経験も踏まえて言うところ、本を読む人は昔からそれほど多くはなかったと思います。現代は娯楽の種類が増えたので、その分だけ「ライトな読者層」は減りましたが、本当に読書が好きな「ヘビー



三上延さん（右）と山岡三子さん
（2015年12月3日 小田急ホテルセンチュリー
サザンタワーにて）

な読者層」は、以前と比べて減りも増えもしていないというのが私の印象です。

私が小中学生の頃、大人って全く本を読まないんだと思っていました。私の両親の世代は高度経済成長の時代だったこともあって、仕事が忙しくて本を読む時間をとれなかったのでしょうか。

私自身は、本なんて読まなくてもいいじゃないか、その時々にとつておもしろいものがあればいいのではないかとという考えを持っていますが、ただ、本を読まない人、敬遠している人は、本は難しくてよくわからないものだとか誤解しているのではないかと感じます。40年ちかく本を読んできましたが、全然飽きませんし、こんなにおもしろい娯楽を他に知りません。

若い人に何か言うとしたら、いろいろなことを楽しんでほしい。スポーツでもマンガでも映画でもいいけれど、その後どこかで本のおもしろさに出会ってもらえればいいなと思います。